

国際政治特集：ロシアの専門家から見た中露の軍事協力

漢和防務評論 20180106(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中露の軍事協力の現状と今後について、KDR がロシアの軍事専門家に質問した内容を記事にしました。
あくまでロシア側に立った説明と意見なので 100% 妥当な内容ではないと思われませんが、制裁を受けているロシア側としてはどう考えているか、よくわかる内容になっています。米国の制裁がロシアと中国を接近させていると言外に主張しています。
中国はしたたかで、ロシアやウクライナに対して、ハイエナのように振舞っています。
記事が長文なので、興味のある方はお読みください。

本誌編集部モスクワ

ロシアが中国から武器部品の提供を受けることに関して

ウクライナと西側がロシア軍事工業に制裁を加え始めてから、最近 3 年間に、中国がロシアに武器部品を提供し始めたのを KDR 記者が認めた。ロシア軍は中国製部品の使用を開始した。これはロシアとしては見たくない光景である。しかしロシアは中国に依存せざるを得ない理由があり、これは今後の中露軍事協力の影響を与える可能性が極めて高い。

ロシアの軍事専門家 VASILY KASHIN 氏 (SENIOR RESEARCH FELLOW AT THE MOSCOW CENTER FOR STRATEGIES AND TECHNOLOGIES) は KDR に次のように述べた：

ロシアは一部の航空部品領域、例えば接続器、各種ポンプ等の方面で中国の支援を受けている。しかし金額は小さい。専門家は約数千万ドル規模と見ており、1 億ドルは超えていない。ロシアが中国に輸出する武器の金額に比べればわずかだ。繰り返すが、現在のロシアや中国の民族主義情緒は当時のソ連を超えているが、米国や欧州を含めて如何なる国家であろうと武器部品を 100% 国産化している国はない。ワルシャワ条約の時代には兵器生産は分業であり、チェコでは練習機を、ポーランドでは戦車を生産していた、と。

しかしロシアは中国との協力を極めて慎重であり、できるだけ公表されたルートで中国から部品を購入しようとしている。専門家は会社名を名指しして、韓国、台湾、日本からの軍民両用部品の購入を希望していた。

ロシアの専門家 ANDREI FLOROV 氏 (EDITOR IN CHIEF OF THE EXPORT

OF WEAPONS MEDIA OUTLET) は KDR に次のように述べた：

ロシア軍事工業の指導者は、中国製部品の品質に不信感がある。通常最初の部品は品質良好であるが、次に来る製品は次第に不合格になる。典型的な例が海軍用のディーゼルエンジンである。輸入したばかりの段階で品質問題が発生している。これらの輸入部品は技術レベルが低い製品であり、当然ロシアでも生産できるが、工場建設に時間がかかるのだ、と。

また ANDREI FLOROV 氏は：

当初計画では、従来ウクライナが生産していた部品の 95 乃至 96%を 2019-2022 年にかけて 100%国産化する。2025 年から、3 軍に各種最新装備が導入される。そうなると、ロシア以外の国はこれら最新装備の部品を生産することはできない。なぜなら全ての部品が最新設計の装備品であり、ロシアだけしか生産できないからである。このような理由で、長期的に見れば中国製軍用部品問題をそれほど心配はしていない、と述べた。

KDR は、一部の無線通信機、軍用コンピューター、行動電話の生産領域に中国の会社が積極的に参入を試みているのを認めた。これらの会社はロシアの対テロ部門に一部の行動電話や軍用コンピューターの部品を提供し始めた。

ロシアの専門家は楽観しているが、今後ロシアに提供される中国製部品を侮ることはできないと、KDR は考える。ロシア軍は、確かに 2015 年から最新型の主力戦車、装甲車、戦闘車、SU-35、SU-57 型作戦機等が導入され、ほぼ全ての領域で武器の更新が進められている。しかしロシアは今後 20 年間、依然として大量の SU-27、MIG-29 を就役させる必要があり、中国からの部品供給を完全に無視することはできない。

ロシアの対中武器輸出政策の変化

ロシアは政治的判断から、特に SU-35 のうち最先進型を中国に輸出したが、ロシアは中国に対し技術上 10 年のアドバンテージを維持できるのであろうか？ 1991 年から、中露は軍事協力を開始したが、当時のロシア軍人、軍事工業界には一つの共通認識があった：すなわち中国に対し、技術で 10 年以上のアドバンテージを確保することである。

KDR 記者が驚愕したことは、最近 4 年間で、ロシア軍内部、軍事工業内部に新たな共通認識が形成されたことだ：それは、中国はもはやロシアの脅威とはならない、との認識である。現在の中国の政治機構に変化がなければ、ロシアは中国を軍事的脅威とは考えない、との認識である。

VASILY KASHIN 氏は何度も強調した：現在の中露関係は、軍事協力が第一ではない。中露の経済の結びつきが大々的に強化され、中国はロシアに対する最大の投資者になった、と。

確かに KDR 記者は 1 年ぶりにロシアを訪問したのであったが、中国の経済的影

響力がますます増大しているのを認めた。主な百貨店、シェレメチェボ国際空港、大きな汽車の駅には中国語が表記されている。そして至るところに中国人がいる。

次に、ロシアはすでに戦術核兵器をもって極東の安全を確保する基本戦略を確立している。したがって専門家は：多少の SU-35 を中国に輸出したところで脅威とはならない、と考えていた。ロシアはこのような協力を通じて必要な資金を獲得し、次世代の武器の開発を行う、と。

最近の中国とウクライナの軍事協力をどう見るか？

ロシアの軍事工業界の責任者は、この問題に大きな関心を持っていた。ウクライナはロシアとの軍事協力関係を中断しているが、ウクライナの軍事工業は伝統的にロシアに大きく依存しており、従来、主に部品を提供していた。

ウクライナとロシアの軍事協力関係は過去のような親密な関係に戻るであろうか？ロシアは、ウクライナと中国の最近の協力関係をどう見ているか？

ANDREI FLOROV 氏は KDR に次のように述べた：

1. ロシアは、過去のウクライナとの軍事協力関係に戻る可能性はない。なぜなら 2025 年以降、ロシアでは一連の新型装備が導入され、ウクライナの軍事技術との差がますます大きくなるからである。ウクライナの巨大な軍事工業集団は、ますます小さな会社に分割される。現在ウクライナ軍の武器購入費は毎年約 5000 乃至 6000 万ドル程度であり、従来 of 巨大なウクライナ軍事工業を維持することはできない。しかもウクライナは、武器禁輸以前から、武器部品の品質が低下しつつあり、ロシアは新たな対策を考慮中であった。ウクライナからタイ国に輸出した OPLOT 主力戦車の質が低下しつつあり、これが大きなきっかけとなった。

2. ウクライナが現在中国に輸出している各種輸送機、ヘリ技術は、中国の軍事技術の進歩に大きな助けにはならないか？ロシアは今までの姿勢を維持するか？との質問に、ANDREI FLOROV 氏は：

中国人が獲得すべき技術は 1990 年代初、中期、及び 2000 年前後にすでに獲得した、と見ている。現在中国で最も需要が多いのは軍用エンジンであり、またヘリのエンジンの設計図、技術である可能性がある。このほか聯合設計した軍用輸送機及びエンジンの一部の経験が欲しいと思われる。これらの技術はソ連の 1980 年代の技術である、と述べた。

ウクライナは中国及び北朝鮮に ICBM 技術を輸出したのか？

これに対して数名の軍事専門家の回答は同じであった。

VASILY KASHIN 氏は：1990 年代から、中国は民用宇宙技術協力を名目に、ロ

シア南方機械工場と協力する文書を取り交わし、民用のロケットシステム、宇宙システムの共同開発を行った。中国は、これらの協力を通じてウクライナのロケット専門家と接触し、軍用の設計図を獲得した。また中国はウクライナの多くのロケットの専門家を雇用した。当然民用ロケット開発の名目であった。たとえウクライナのメディアがニュース報道で公表したとしても、中国や北朝鮮がウクライナの南方機械工場にスパイを送り込もうとしたことを、ウクライナ自身が気付かないはずがない。ウクライナの防諜能力は相当弱体であった。北朝鮮がウクライナの弾道ミサイル技術の一部の設計図を獲得した可能性は否定できない。大きなミサイル部品を獲得するのは容易ではないからだ。中国については、獲得した技術資料の水準が高い可能性がある。

VASILY KASHIN 氏は：特に 1990 年代に中国に密輸された 6 発の巡航ミサイルは、極めて安い価格で売却された。これは中間層の幹部が中央政府に背いて売ったものである。当時ウクライナは混乱した状況にあった。米国は、現在のウクライナの対中政策に危惧し影響力を行使しようとしたが、すでに遅かった。ウクライナの最高裁判所が中国による MOTOR SICH エンジン会社の株式取得を中止させたのは、米国の圧力による可能性が極めて高い、と述べた。

しかしこの会社と中国の協力関係は 1990 年代から始まっていた。この会社は資金が欲しかった。たとえ中国が株式を取得できなかったとしても、米国は、中国による設計図獲得や人員の交流までは阻止できない。ウクライナと中国が協力して重慶市に工場を建設する事業は継続している。ウクライナのエンジン技術者が大量に中国に渡っている。

KDR は：これらの協力は、中国が MI-17 へのエンジン及び AI-222 シリーズの練習機エンジンを自力生産するのに助けになる、と考える。影響は無視できない。

中国の軍事技術について

中国の軍事メディアは、彼らの技術に自信を持ち、例えば第 5 世代戦闘機等はすでにロシアを凌駕したと述べているが、本当にそうか？

VASILY KASHIN 氏は：メディアは民族主義的反応をする。實際上、中国の軍隊や軍事技術者は、本音では、ロシアに比べはるかに遅れていることを謙虚に認めている。中国は過去 10 年で軍事技術は良好な成果があった。例えば、初めて弾道ミサイルを対艦艇に利用したことである。また現在生産中の大型アクティブ・フェーズド・アレイ・レーダー搭載の水上艦はロシアを超えている。しかし航空エンジン、地対空ミサイル、核潜水艦、戦略ミサイル等々の分野では依然ロシアよりも遅れており、ロシアの援助が必要だ。例えば J-20 戦闘機は、エンジン技術から見ると、第 5 世代戦闘機には属さないのではないか？勝手な判断を下すのはよくないが、関連情報が少ないので、と述べた。

なぜ中国は SU-35 を買ったのか？今後の目的は？

J-20、J-11D/E が高性能で SU-35 よりも優れているのならば、なぜ中国は SU-35 を買う必要があるのか？

VASILY KASHIN 氏は：その理由は、SU-35 は SU-27 の最終改良型であるからだ。中国は SU-35 の購入を通じて、その最終改良の方法を研究する。主として J-11 シリーズ戦闘機の将来の最終的なモデルを SU-35 を基準に考える、ということだろう、と述べた。

この他、ロシアの専門家は明確に：中国製武器の稼働率は低い。戦時は、平時と全く異なる。一旦開戦となれば、戦闘機エンジンのオーバーホール時間は 500 時間以下となる。或いはそれ以下になる。如何に戦うのか？と述べた。

ANDREI FLOROV 氏は：中国は十分努力している。資金も大量に投入している。現在の発展速度から見ると、2030 年前後には、中国の軍事技術は概ねロシアに追いつくであろう、と述べた。

現在の中露の軍事協力事業は何か？

ロシアの国防部部长 SHOIGU は最近次のように述べた：全部で 3 つの軍事協力事業が中国と進行中である。第一は SU-35、第二は S-400、第三は特定の対艦ミサイルである、と。ロシアは型式までは公表しなかった。

SU-35 について、VASILY KASHIN 氏は：中国は、24 機の SU-35 の戦力を研究中である。その後次の段階で中国は一部の部品の生産許可証の取得を交渉しようとしている。それは SU-35 のサブシステムの生産であり、J-11 シリーズを改良するための。例えばエンジン、アビオニクス等々である、と述べた。

KDR 記者は次のように見た：中国は、SU-35 全体の生産許可証を求める可能性は少なく、一部のサブシステムの技術を欲しがっている。このように見ると、今後 SU-35 を巡って中露は毎年商取引を継続する可能性がある。ロシアは利益を得ることが出来る。ロシアは中国が SU-35 をコピーし輸出することを心配していない。なぜなら現在まで中国は J-11 を 1 機も輸出していないからである。

J-20 の生産に関して

VASILY KASHIN 氏は：J-20 は、すでに鼎新基地の青軍部隊（西側空軍を想定）に配備され、第 4 世代戦闘機と対抗訓練を行って F-22、F-35、地対空ミサイルに対抗する戦法を研究している。しかしこの戦闘機が大量に部隊に配備されるまでには相当時間がかかる。しかも機体が高価である。したがって今後長期間、中国空軍は依然として大量の第 4 世代戦闘機を装備し続けねばならない。SU-35 の重要性はここにある、と述べた。

中露双方はどのような対艦ミサイルの共同研究を行おうとしているのか？

この点について、ロシアの戦術聯合ミサイル生産集団の BORIS OBLOSOV 総

裁は、すでに以前に **KDR** 記者に対して確認していた。しかし彼はどのようなミサイルかを明らかにすることを拒否した。

VASILY KASHIN 氏は、最も可能性があるのは **YJ-18** の改良型であると見ている。このミサイルの原型は **CLUB-S** であり、中国は **3M54E** 型潜水艦発射ミサイルを取得した。そして当初に複製を試みた、と述べた。

KASHIN 氏は：複製の過程で問題が発生した可能性があり、中国はロシアに支援を求めた、述べた。

YJ-18 はすでに公開されている。外形は **3M54E** に酷似している。しかし最近、中国の官方ニュースは、” 新型超音速、亜音速結合の潜水艦発射対艦ミサイルの開発過程 ” を報道し、中国が自力開発していることを強調した。**KDR** は、これは **YJ-18** の開発を暗示したものと考えている。

KDR が掌握した状況は、**YJ-18** の射程がさらに延びたようだ。輸出型の **3M54E** は射程を制限している。

KASHIN 氏は：これは当然可能性がある。中国が購入したのはある部品の生産許可証である。したがって彼らは自ら改良することができる。射程を増大させるのは問題ない、と述べた。

ロシアが中国から軍事装備品を購入することがあるだろうか？

例えば無人機はどうか？

この質問に、ロシア国防工業界のその他の消息筋は **KDR** に対し：ロシア内部では、過渡的に中国製の軍用無人機を少量購入することを検討中である。シリアの作戦に使う可能性がある。ロシアは国産の攻撃型無人機を開発を行っており、まもなく完成するが、生産と訓練には時間がかかる、と述べた。

このほか、中国がロシア製大型液体ロケットエンジンを輸入する件で中露双方が交渉中である。このロケットエンジンは民用である。しかし現在は依然進展はない。

北朝鮮との関係について

モスクワの北朝鮮に対する政治的影響力が回復した。

ANDREI FLOROV 氏は：両国の協力規模は小さい。しかしモスクワは、北朝鮮の核兵器、弾道ミサイルを米国との取引に利用する可能性は極めて高い。例えば米国のロシアに対する経済、軍事制裁問題である。したがってロシアは北朝鮮に対する経済、政治協力を中止することができない、と述べた。

このほか北朝鮮の **ICBM** 技術が低く評価されているとの問題について

VASILY KASHIN 氏は：外部世界は従来から北朝鮮の国家を低く見ていた。例えば専制社会であるとか、人口はわずか **2000** 万人であるとか。第一、北朝鮮には発達した教育体系があり、人々は聡明で、工業の基礎はしっかりしている、

と述べた。

北朝鮮を訪問したことがあるロシアの官方代表団の専門家は **KDR** に対し次のように述べた：北朝鮮はロシアの専門家に対し、彼らが生産したデジタル工作機械、3D レーザープリンター等々を展示した。デジタル工作機械の技術はソ連の 1980 年代の水準で、コンピューター技術は 1960 乃至 1970 年代の中国よりもはるかに優れていた。また情報産業も一定の高い水準に達している、と。

したがって弾道ミサイルの発達状況から見ると、北朝鮮は中国と同じような思想で進んでいるように見える。DF-3、DF-4 から JL-1、DF-21 弾道ミサイル等に至る道である。ただ防御が困難な DF-5 のような大型 ICBM を開発する可能性は小さい。この点は、**KDR** 記者の意見と全く同じであった。

北朝鮮の原子炉について

VASILY KASHIN 氏は：多くの改良技術は、公開された情報から得ることが出来る。たとえばロシアの専門家は、寧辺の原子炉の設計は 1950 年代の英国の原子力発電所を参考にした、と見ている。このほか西側は社会主義の優越性を認めようとしなない。多くのミサイル、核の部品は公開されたルートで購入することができる。その後、北朝鮮は国産化を実現した。コストは安い。しかも主にかかるのは人材のためのコストである。西側資本主義国家に比べればあまりかからない。しかし技術者に支給する住宅や自動車は必要だ。したがってロシアの専門家は、ICBM の開発、核兵器の開発の過程で、北朝鮮はおおきな資金問題に直面したものと考えている。

全体的に見て、中露の軍事工業協力は、政治的制約がますます少なくなっている。

以上